

「バイリンガル作家」ナンシー・ヒューストン

横川, 晶子

<https://doi.org/10.15017/13234>

出版情報 : Stella. 27, pp.81-85, 2008-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



「バイリンガル作家」ナンシー・ヒューストン

横 川 晶 子

2008年10月、フランスの作家ナンシー・ヒューストンが初来日した¹⁾。フランス大使館の後援のもと、日仏学院等でフランス語による講演をおこなったが、じつはヒューストンを「フランスの作家」と形容するには多少の留保が必要となる。

ヒューストンは1953年に英語圏カナダのカルガリーに生まれ、英語を母語としてカナダおよびアメリカ合衆国で教育を受けた。学校で学んだフランス語に興味をもち、1973年にフランスに留学、当初は1年で帰国の予定だったが、そのままフランスに住み続け現在にいたる。フランスに帰化したブルガリア人との結婚後フランス国籍を取得したため、ヒューストンはカナダ人であり、フランス人でもある。

フランス滞在当初、ヒューストンはロラン・バルトの指導を受けながら言語学にかんする論文などを執筆していたが、1981年に最初の小説『ゴルトベルク変奏曲』を発表、同作はフェミナ賞の候補作となり、一躍文壇の注目を集める。その後も活発な創作活動を続け、現在までに11の小説を出版、また評論やエッセイも多数発表している。

執筆言語は、評論や論文はフランス語だが、小説はフランス語と英語の二言語を採用している。フランス語を母語としないフランス語作家の存在自体、最近ではそれほど珍しいものではないが、ヒューストンにかんして特徴的なのは、自己翻訳によって二言語の創作活動をおこなう、いわば「バイリンガル作家」である点だろう。さらに、フランス語で小説家としてデビューしたのち、10年を経て母語の英語に回帰し、双方の言語を同等に使用するようになったことも、創作と言語の関係を考察するうえで興味深い。

言語を選択するにあたりヒューストンは、亡命や国外移住を余儀なくされた作家たちのような政治的かつ悲劇的な理由を抱えていたわけではない。フラン

スに在住していることでフランス語のほうが出版しやすいという外的な条件もあったが、それ以上に、母語から逃れフランス語で書きたいという強い欲求があったことを後に語っている――

フランス語は母語の英語に比べ […] 情動の負荷が少なく、それゆえ危険性も少なかった。フランス語は冷静なので、私も冷静に近づいていった。フランス語は私にとってそれほど重要なものではなかった。なめらかで均質な実体で、つまりニュートラルだった。今になって分かることだが、最初のころ、フランス語は私に、書くことにおいて大きな自由を与えてくれたのだ。²⁾

ヒューストンは初めての小説を一気に書き上げ、その後もフランス語で次々と新しい作品を発表していった。「小説家ヒューストン」を形成したのはフランス語だったといっても過言ではないだろう。

それから10年、英語へ回帰したきっかけのひとつが、当時のフランス文学界がアカデミックな理論に席卷され、虚構の物語を書くことがむずかしい閉塞的状况にあったことを、ヒューストン自身明らかにしている――

私は理論とは無縁の純粹さに飢えていた。立派な服を脱ぎ捨て、ボロ着姿の自由な文章を書きたかった。悲壮的なものが入り込んできてもいいから、あらゆる感情の段階をくまなく探り、バルト風の揶揄的な注解やペレック風の注釈を恐れずに、何のひねりもない素朴な物語を信じて、熱く語りたいかった。³⁾

こうして今度はフランス語から逃れ、祖国カナダを舞台にした『草原讃歌』を英語で完成させる。しかしアメリカでもカナダでも出版を引き受けてくれる出版社が見つからず、やむをえずみずから翻訳を手がけたフランス語版が先にフランスで出版された⁴⁾。この『草原讃歌』フランス語版はフランスでベストセラーとなり、さらにカナダの著名な文学賞「総督大賞」を受賞するが、そのためヒューストンは、英語圏カナダから「英語を捨てた」ことで裏切り者扱いをされる。ところが、この作品が最初に英語で執筆されたことが知られると、今度はフランス語圏カナダで『草原讃歌』をフランス語の小説として扱うべきではないという批判が生じるなど、二言語使用をめぐるカナダの複雑な状況を背景に一種のスキャンダルが生じた。さらにフランスでも、それまで「フランス文学」として扱われていたヒューストンの作品が「ケベック文学」に分類され

るようになるなど、ふたつの言語を使うことで、文学におけるナショナリズムの問題を正面から意識するようになる⁵⁾。

しかし、作品改良のために翻訳がきわめて有効な手段であることを認識したヒューストンは、自作を訳す作業が創作に劣らずエネルギーと時間を要する難事であるにもかかわらず、以来、自己翻訳による英仏2カ国語で小説を出版するようになる。どちらで書き始めるかは登場人物が使う言語次第だが、ひとつの作品を英語とフランス語で書き分けることもあるという。

その後ヒューストンの評価は次第に高まり、『暗闇の楽器』(1996年)は「高校生のゴンクール賞」を、『天使の記憶』(1998年)は『エル』誌読者大賞を、そして2006年には『時のかさなり』がフェミナ賞を受賞する。

同年、フランスではアメリカ人のジョナサン・リテルがゴンクール賞を、コンゴ出身のアラン・マバンクがルノー賞を、そしてカナダ出身のヒューストンがフェミナ賞を受賞するなど、フランス文学界における「国際化」が印象づけられた。この現象に後押しされるかのように、翌2007年、「〈世界＝文学〉のために」という宣言文が『ル・モンド』紙に掲載された⁶⁾。これは、「フランス語圏文学」を周辺かつ格下に位置付ける傾向にある従来の文学制度から自由になり、フランス語で書かれた作品はすべて、フランス文学でもフランス語圏文学でもなく〈世界文学〉として、国家や言語の境界とは関係なく対等なものとなすというマニフェストである。この宣言文には44名の作家の署名が付されているが、ル・クレジオ、タハール・ベン・ジェルーン、マリーズ・コンデ、ディディエ・デナクスなどに並んでヒューストンの名もあった。

「バイリンガル作家」としての立場から、みずからの作品を既成の概念で分類されることに機会あるごとに異議を唱えるヒューストンは、個人としても紋切り型のレッテルを貼られることに抵抗する――

私自身についてこんな風に言われるのをよく耳にする――「彼女はみずからのアイデンティティを求めている」、「彼女は複数のアイデンティティに引き裂かれている」……。

いえ、いえ、私は少しも苦しんでなどいない。アイデンティティのチェスゲームで駒をいくつか進めることができたおかげで、他人のアイデンティティの虚構性がよくわかるようになったし、そこから生じるいくつかの罠(人種差別主義、過度の愛国心、誇大妄想狂など)を避けることができたようになっただけだ。⁷⁾

過度の帰属意識がもたらす弊害は避けるべきだとする一方、自分はどこにも属さないという独我論的なニヒリズムの危うさを認めるヒューストンは、最近では「揺れ動く弱いアイデンティティの礼賛」⁸⁾という表現でみずからの目指すべき方向を説明している。すなわち、人は自分に与えられたものを謙虚に受け継ぎながらも、自分がいる場所から自発的に身を引き離し、他者との同一化を試みるべきである。その同一化の最良の手段のひとつが文学であり翻訳である、というのだ。作品を創作することはすでに翻訳であり、作家は常にその不完全さを嘆く。翻訳家もまた不完全な伝達を嘆く。それでも作家は、そして翻訳家は、真実のごく一部でも伝えられることに望みをかけ努力をするしかない。そして実際に人類はその努力の恩恵に浴している。「翻訳は裏切りではないというだけではありません。それは人類にとっての希望なのです」⁹⁾というヒューストンのことばは、「自己翻訳」を実践するバイリンガル作家の立場から発せられた翻訳論として興味深いものであり、また、複数の語りの声による構成を特徴とするヒューストン作品を理解するための手立てともなるだろう。

註

- 1) ヒューストンの最新小説『時のかさなり』の邦訳出版（新潮社、拙訳。原著レフェランスは *Lignes de faille*, Paris : Actes Sud, 2006）に合わせての来日である。なお、本稿には筆者がヒューストン自身から直接聞いた内容が含まれている。
- 2) Nancy HUSTON, *Nord perdu suivi de Douze France*, Paris : Actes Sud, 1999, pp. 63-64.
- 3) *Ibid.*, p. 50.
- 4) 『平原讃歌』は1993年に前後してフランスとカナダで出版された。Voir Nancy HUSTON, *Cantique des plaines*, Paris : Actes Sud, 1993 ; *Plainsong*, Toronto : Harper Collins, 1993.
- 5) ヒューストンはそもそも、白人である自分の作品が「フランス文学」に分類され、アフリカ系やアラブ系の作家たちの作品が「フランス語圏文学」に分類されることに大きな違和感を抱いていたという。
- 6) この宣言文は2007年3月16日の『ル・モンド』紙に掲載され、その後ガリマール社から同題の本が刊行された。Voir Michel LE BRIS, Jean ROUAUD et Eva ALMASSY, *Pour une littérature-monde*, Paris : Gallimard, 2007.
- 7) Nancy HUSTON, *L'espèce fabulatrice*, Paris : Actes Sud, 2008, p. 51.

- 8) 2008 年 10 月来日の際におこなった講演会の邦題でもある（原題は «Éloge de l'identité faible et fluctante»）。
- 9) ナンシー・ヒューストン「バイリンガリズム，エクリチュール，自己翻訳——その困難と喜び」（野崎欽訳），『新潮』2008 年 12 月号，252 頁。